

平成 27 年度

病虫害発生予察情報 第 1 号

長期予報

北海道病虫害防除所 平成 27 年 3 月 30 日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

札幌管区气象台発表の 2 月 25 日付の暖候期予報および 3 月 25 日付の 3 か月予報は以下のとおりです。

北海道地方 3 か月・暖候期予報 (4 月から 8 月までの天候見通し)

暖候期 平成 27 年 2 月 25 日

3 か月 平成 27 年 3 月 25 日

札幌管区气象台発表

< 気温の各階級の確率 (%) >

4 月	30	30	40
5 月	40	30	30
6 月	30	40	30
6～8 月	30	40	30

■低い □平年並 ■高い

< 降水量の各階級の確率 (%) >

4 月	40	30	30
5 月	30	40	30
6 月	30	40	30
6～8 月	20	40	40

■少ない □平年並 ■多い

春（4 月）：天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。気温は平年より高い確率が 40%、平年並または低い確率がともに 30%です。

（5 月）：天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は平年より低い確率が 40%、平年並または高い確率がともに 30%です。

夏（6 月）：天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は平年並の確率が 40%です。

（6 月から 8 月）：太平洋高気圧の北への張り出しが弱く、北海道は気圧の谷の影響を受けやすい見込みです。一方で、大気全体の温度が高いと予想されることから、夏の平均気温はほぼ平年並で、降水量は平年並が多い見込みです。天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みです。オホーツク海高気圧が出現する可能性は、平年と同程度です。エルニーニョ現象が発生する可能性は、平常の状態の可能性と同程度です。

上記3か月予報、暖候期予報および近年の発生状況による平成27年度の主要病害虫の発生予想は以下のとおりです。なお、病害虫の発生予想は毎月の気象予報にもとづいて修正し、毎月の予報（毎月末頃発表）、注意報として随時発表します。今後はこれらの予察情報を参考にしてください。また、発生概況において発生量を評価している病害虫の内、最盛期や評価時期が暖候期予報の期間から外れている病害虫については、長期予報に掲載していませんので、ご理解願います。

平成27年度の病害虫の発生予想

注1) 平年値(過去10年間の平均値)と比較し、◎:やや多～多、□:並、△:やや少～少を示す

注2) 近年の発生状況の()は、平年値がなかったため暫定的な評価

注3) 本年の発生期・発生量の()は、新規項目のため平年値なし

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		22	23	24	25	26	発生期	発生量
水稲	いもち病(葉)	◎	△	△	△	△	並	並
	いもち病(穂)	◎	△	△	△	△	並	並
	紋枯病	◎	□	◎	◎	◎	並	やや多
	縞葉枯病	△	□	◎	□	△	並	並
	ばか苗病	□	□	◎	◎	□	—	並
	苗立枯病	—	—	—	(△)	△	—	並
	種子伝染性細菌病	—	—	—	(△)	△	—	並
	ニカメイガ	□	△	△	□	△	—	やや少
	ヒメトビウンカ	△	□	□	□	□	並	並
	イネドロオイムシ	□	◎	△	△	△	並	並
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	△	△	△	□	△	並	やや少
	イネミギワバエ	△	△	△	◎	◎	並	並
秋まき小麦	フタオビコヤガ	◎	□	□	□	△	並	やや少
	赤さび病	△	△	△	◎	□	早	やや多
	うどんこ病	△	△	△	△	△	並	並
	眼紋病	□	□	△	△	△	—	並
春まき小麦 (春まき)	赤かび病	◎	◎	□	△	△	—	やや多
	ムギキモグリバエ	—	—	□	◎	△	並	やや少
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病	□	△	△	△	△	—	やや多
	ムギキモグリバエ	—	—	—	—	(△)	並	やや少
大豆	べと病	□	□	□	△	△	並	やや多
	わい化病	△	△	△	△	△	—	少
	マメシンクイガ	◎	◎	◎	◎	◎	並	やや多
	食葉性鱗翅目幼虫	◎	□	△	◎	◎	並	やや多
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	やや少
小豆	菌核病	□	△	△	△	△	並	やや多
	灰色かび病	△	△	△	△	△	並	やや多
	茎疫病	□	□	△	△	△	—	並
	食葉性鱗翅目幼虫	◎	◎	□	◎	□	並	やや多
菜豆	菌核病	□	□	△	△	△	並	やや多
	灰色かび病	□	△	△	△	△	並	やや多
	黄化病	△	△	△	□	△	—	少
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	やや少
ばれいしょ	疫病	□	□	□	△	△	並	やや多
	軟腐病	□	□	◎	□	□	—	並
	黒あし病	□	◎	◎	◎	□	—	並
	そうか病	△	□	□	□	□	—	並
	粉状そうか病	△	□	□	□	△	—	並
	アブラムシ類	△	△	△	△	□	並	やや少

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		22	23	24	25	26	発生期	発生量
てんさい	褐斑病	◎	◎	◎	△	□	並	やや多
	根腐病(黒根病を含む)	◎	◎	□	□	△	—	並
	西部萎黄病	—	—	—	—	—	—	(多)
	ヨトウガ(第1回)	◎	△	△	◎	◎	並	やや多
	ヨトウガ(第2回)	◎	△	△	◎	◎	並	やや多
たまねぎ	白斑葉枯病	◎	□	□	△	△	並	並
	軟腐病	◎	□	□	△	△	—	並
	乾腐病	◎	△	□	□	□	—	並
	タマネギバエ(タネバエを含む)	△	◎	△	△	△	—	やや少
	ネギアザミウマ	□	□	□	△	◎	並	並
	ネギハモグリバエ	—	—	—	—	—	(並)	(多)
だいこん	軟腐病	◎	□	◎	◎	△	—	並
	キスジトビハムシ	◎	□	□	□	△	—	並
あぶらな科 野菜	コナガ	△	△	△	△	△	—	やや少
	ヨトウガ	△	△	△	△	□	並	やや多
りんご	モニリア病	□	◎	△	△	△	並	並
	黒星病	△	△	△	△	◎	並	並
	斑点落葉病	△	△	□	△	◎	並	やや少
	腐らん病	△	□	□	□	□	—	並
	ハマキムシ類	△	△	△	△	◎	並	やや多
	モモシンクイガ	◎	◎	△	△	◎	並	やや多
	ハダニ類	◎	△	△	◎	△	並	やや少
	キンモンホソガ	△	△	△	△	△	並	少

平成 27 年度に多発が予想される病害虫

1. 水稻の紋枯病

近年、道内では夏季の高温傾向が続いており、平成 26 年は 5～7 月にかけて高温となったことから紋枯病の発生が目立った。近年は本病の防除が実施されていないほ場が多く、発生ほ場では伝染源の密度が高まっている可能性があり、平成 27 年は夏季が並温多雨傾向と予報されているものの注意が必要である。窒素肥料の多用を避けると共に、前年に発生が確認されたほ場では出穂前の薬剤散布を実施する。

2. 秋まき小麦の赤さび病

平成 25 年に抵抗性“やや強”の「きたほなみ」においても赤さび病の発生がみられた。平成 26 年は、このことを踏まえ防除が実施されたことにより発生量は平年並となったものの、引き続き注意が必要である。本病は殺菌剤の散布適期を失うと防除が困難となるので、下葉に本病の発生が多く見られる場合は、止葉抽出期から穂ばらみ期にかけての薬剤散布が必要である。さらに、出穂期以降は赤かび病との同時防除で対応する。

3. 小麦の赤かび病

平成 27 年は夏季に降雨が多いと予報されている。赤かび病は降雨があると胞子の飛散が促進され、特に開花期は本病に対する感受性が最も高まる時期であり、出穂期から開花期に雨天が続くと被害が大きくなる。本病に対する防除は、開花始からの薬剤散布が重要であり、小麦の生育を観察しながら散布適期を失わないようにする。

4. 大豆のべと病

本病は、汚染種子由来の発病株から、多湿な条件でまん延する。平成 27 年は夏季が並温多雨傾向と予報されていることから、本病に好適な条件になる可能性が高い。健全種子を使用することが重要であると共に、防除ガイドを参考に適切に防除を行う。

5. 豆類の菌核病および灰色かび病

平成 27 年の夏季は並温多雨傾向と予報されている。開花期以降、低温湿潤な条件が続くと菌核病および灰色かび病の発生が多くなると予想される。防除ガイドを参考に薬剤散布を実施するが、耐性菌が出現している薬剤もあるので、薬剤の選択に注意する。

6. 大豆のマメシンクイガ

本種による子実被害は、近年多発傾向が続いており、越冬密度も高いと推測される。そのため、平成 27 年は夏季が並温多雨傾向の予報であるものの、本種の発生は昨年に引き続き多くなると予想される。防除ガイドを参考に薬剤の茎葉散布を実施する。

7. 豆類の食葉性鱗翅目幼虫

豆類を加害する食葉性鱗翅目幼虫は主にキタバコガ、ツメクサガ、ヨトウガである。平成 26 年は、大豆、小豆で食葉性鱗翅目の被害が多発した地域が認められ、越冬密度が高いと推測される。平成 27 年は夏季が並温多雨傾向の予報であるものの、昨年に引き続きやや多い発生が予想される。防除ガイドを参考に薬剤の茎葉散布を実施する。

8. ばれいしょの疫病

平成 27 年は夏季が並温多雨傾向と予報されており、本病の発生に好適な条件となる可能性が高い。FLABS を参考に適期防除をこころがけると共に、初発が確認された場合はすみやかに防除を開始する。

9. てんさいの褐斑病

本病は 7～8 月が高温多湿な年に発生が多く、平成 27 年は夏季が多雨傾向の予報であることから発生量は平年よりやや多くなると予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。また、十勝地方では Q○I 剤耐性菌が広く確認されており、本病防除に Q○I 剤は使用しない。その他の地域においても、本病に対する Q○I 剤の使用に当たっては十分に注意する必要がある。

10. てんさいの西部萎黄病

近年、本病は多発傾向が続いている。病原ウイルスを媒介するモモアカアブラムシは、冬期間においてもハウス内の植物残渣や雑草で生存が確認されている。そのため、保毒したアブラムシがてんさいほ場内へ侵入しないよう、越冬ハウス内の植物残渣や雑草はすべて除去し、適切に処分する。また、薬剤の苗床灌注や茎葉散布も適切に行い、本病による被害が拡大しないよう注意する。

11. てんさいおよびキャベツのヨトウガ

平成 26 年は、てんさいなどで本種が多発した。平成 27 年は夏季が並温多雨傾向の予報であるものの、越冬密度が高いと推測されるため、第 1 回、第 2 回ともに平年よりやや多めの発生が予想される。幼虫の加害開始時期は、6 月下旬から 7 月上旬頃（第 1 回）と 8 月下旬から 9 月上旬頃（第 2 回）である。老熟幼虫に対しては薬剤の防除効果が劣るので、ほ場をよく観察し、早めの防除をこころがける。

12. たまねぎのネギハモグリバエ

平成 25 年からたまねぎで本種の被害が多発しており、葉身被害だけでなくりん茎への幼虫の食入被害が大きな問題となっている。平成 26 年には葉身被害、りん茎被害ともに発生地域が拡大した。平成 27 年は夏季が並温多雨傾向の予報であるものの、本種の越冬密度は高いと推測されるため、多発生が予想される。越冬世代成虫は 5 月下旬頃に出現し、葉に縦に並んだ白い点状の成虫食痕をつけるため、ナモグリバエなどの他のハモグリバエ類と区別が可能である。幼虫は葉の内部に食入するため薬剤の防除効果が得られにくい。そのため、成虫食痕が確認されたらすみやかに防除を開始する。前年に被害が認められなかった地域においては、初発を見逃さぬようにほ場観察に努める。

13. りんごのハマキムシ類

平成 26 年はハマキムシ類の被害が多く、越冬密度も高いと推測されることから、前年に引き続きやや多い発生が予想される。せん定時には、卵越冬種の卵塊削り落とし、幼虫越冬種活動開始前にせん定枝は園外へ搬出処分するなど耕種的防除に努め、防除ガイドを参考に薬剤の散布をおこなう。

14. りんごのモモシンクイガ

平成 26 年は、本種による果実の被害が多発し、越冬密度も平年より高いと推測される。平成 27 年は夏季が並温多雨傾向の予報であるものの、本種の発生は前年に引き続きやや多くなると予想される。被害果の回収および水浸処理など耕種的防除に努め、防除ガイドを参考に薬剤の散布をおこなう。

発生量が平年より多めとなることが予想される上記病害虫の他、平成 27 年に特に注意を要する病害虫として示した「水稻の疑似紋枯病」、「小麦のなまぐさ黒穂病」の発生状況にも注意し、適切に対応してください。